

## 夫婦における父親の育児行動評価と親アイデンティティ及び 関係効力性との関連

The relationships among father's childrearing behavior , parents' Identity and  
relational efficacy of married couples

加藤 陽子<sup>1)</sup>

Akiko KATO

山下 倫実<sup>1)</sup>

Tomomi YAMASHITA

石田 有理<sup>1)</sup>

Yuri ISHIDA

布施 晴美<sup>1)</sup>

Harumi FUSE

### 要 旨

本研究の目的は、夫婦から家族へと関係性が移行する時期と考えられる第1子誕生後の父母を対象として、父親の育児行動への評価と親アイデンティティの獲得及び関係効力性にどのような関連があるのかを探索的に明らかにすることであった。

平成31年3月にクロスマーケティング社に依頼し、現在3歳未満の子どもが1名のみを家庭を対象にWEB上での質問紙調査を実施した。調査協力者は、男女計200名(男性:平均年齢34.83歳,  $SD = 5.44$ , 女性:平均年齢32.72歳,  $SD = 4.90$ )であった。

夫婦それぞれの育児行動評価(対子ども育児/対母親支援)の高低群を独立変数、親ID(母親/父親)と関係効力感(母親/父親)を従属変数とする2要因の分散分析を行った。その結果、母親の育児行動評価では、父親の自己優先的IDのみに有意傾向の交互作用がみられた。単純主効果の検定を行った結果、対母支援低群において、対子ども育児の低群より高群の方が父の自己優先的ID得点は低かった。また、夫婦の関係効力感、親としての自信のなさ、親役割の受容で対母支援の主効果が確認された。次に、父親の育児行動評価では、母親の自己優先的IDに有意な交互作用、夫の関係効力感、父親としての自信のなさ、父親の自己優先的IDに有意傾向の交互作用がみられた。単純主効果の検定を行った結果、母親・父親の自己優先的IDと父親としての自信のなさにおいて、対子ども育児の低群で対母支援の低群より高群の得点が低く、対母支援の低群で対子ども育児の低群より高群の得点が低かった。また、母親の自己優先的IDでは対母支援の高群で対子ども育児の低群より高群で得点が高く、夫の関係効力感では対子ども育児の低群・高群ともに、対母支援の低群より高群で得点が高かった。以上の結果から、総じて父親の対母支援の高さが夫婦の関係効力性や親IDの形成に影響を与えている可能性が示唆された。

<sup>1)</sup> 十文字学園女子大学人間生活学部人間発達心理学科

Department of Human Developmental Psychology, Faculty of Human Life, Jumonji University  
キーワード: 親アイデンティティ, 夫婦関係, 父親の育児行動, 関係効力性

## 【 問 題 】

成人期のアイデンティティの発達をとらえる上では、青年期に獲得した「個人としてのアイデンティティ」と社会的役割や家庭的役割を担うことによって得られる「関係性としてのアイデンティティ」の2つの柱が欠かせない（岡本，2007）。ただし，男性と女性では主柱が異なり，男性は「個人としてのアイデンティティ」と「職業的アイデンティティ」を2軸とする者が多いが，女性は，「個人としてのアイデンティティ」に加え，親になった後に新たに意味や役割が付与されることによってなる「親としてのアイデンティティ」が重要だとされる（山口，2010）。岡本（1996）もまた，多くの成人男性が職業人としてのアイデンティティを太い幹としたライフコースを歩むのに比して，女性はケアする自分としての母親アイデンティティを持つと述べている。

しかし，近年，ワークライフバランスに対する意識の変化など，家庭を持つ成人男性の生活スタイルはかつてとは大きく様相が異なる。実際，父親の家事・育児への参加が増えており，過去20年間の男性の育児時間は徐々に，しかし確実に増加傾向にある（内閣府統計局，2017）。柏木・若松（1994）は，多くの成人が結婚し子どもを持ち，その結果として親になるという経験は，職業上の地位役割の獲得以上に人々が出会う新鮮な経験であり，長期的にその役割を持つことは，成人にとって発達過程そのものに他ならないと述べた。つまり，男性もまた，母親同様に「関係性のアイデンティティ」としての父親アイデンティティを持つと推測される。

加えて，女性のアイデンティティの様態と家族関係について検討した岡本（1996）は，「個としてのアイデンティティ」と「母親アイデンティティ」を両立している「統合型」について，①「個としてのアイデンティティ」と「母親アイデンティティ」の両方の確立が不十分な「未熟型」より家庭生活に満足していること，②「個としてのアイデンティティ」の達成度は低いが，「母親アイデンティティ」がよく達成されている「伝統的母親型」より，夫からよく理解・受容されていると認知していること，③「未熟型」より家族に対して積極的に関与している，という特徴を明らかにした。これらの結果からは，「個人としてのアイデンティティ」に加え，「関係性としてのアイデンティティ」である「親としてのアイデンティティ」を無理なく獲得することが，母親と父親双方の発達過程において重要であると同時に，夫婦関係や子育ての環境整備のためにも必要なことであるといえるだろう。

ただし，「個人としてのアイデンティティ」と「親アイデンティティ」の調整には，様々な困難が予想される。たとえば，明野（2013）は，子どもの誕生に伴う父親役割行動の調整には「育児」「家事」「妻の精神的支援」における調整過程と，仕事時間を調整し早く帰宅するなどの「生活習慣の修正」における調整過程が同時に行われていることを示唆している。第1子の誕生に伴う子育て時間の増加は，夫婦としての時間を圧迫し，必然的に2人の関係に揺らぎをもたらすだろう。実際，出産後に結婚の満足度が低下することを示した研究も多く（中澤ら，2003；Belsky & Kelly，1994），母親・父親のいずれにとっても，個として，あるいは親としてのアイデンティティを調整することは難しいと考える。

ところで，父親の育児に関する研究には興味深い傾向が認められる。それは，父親が家事や育児などの直接的な育児行動を行うより，母親を支援するといった間接的な育児行動を行う方が，母親の育児ストレスの軽減につながるという結果である（e.g. 西尾，2013；高橋・佐野，2010；芳賀，2000）。このような傾向は山下・加藤・石田（2016）でも示され，夫-妻という関係による相互サポートは母親の親としての効力感を高めるが，父-子関係を介した育児サポート（たとえば，遊び相手，寝かしつけ等）は，逆説的に母親自身の効力感を奪う可能性が明らかとなっている。さらに，山下・石田・加藤

(2017) は、母親が父親の間接的な育児行動を評価するほど、父親は自分の親役割を受容することを示唆した。以上の指摘からは、父母の役割受容と父親の育児行動に関する母親の評価（他者評価）との関連が示唆されているものの、母親あるいは父親の役割受容が父親自身の育児行動の評価（自己評価）とどのような関連にあるかは検討されていない。また、父-子関係を介した育児サポートではなく、夫-妻という関係による相互サポートが、母親あるいは父親としての肯定的な役割受容と関連がある理由についてもほとんど検討されていない。

これまでパートナーからのサポートは、ストレスフルな状況にさらされた個人のポジティブ感情を高めることが明らかにされている (Collins & Feeney, 2000; ただし, 浅野・吉田 (2011) による)。その理由の1つとして、困難な問題に対して「私たちなら対処できる」という効力感を持つことが挙げられる。このような効力感を関係効力性と呼ぶ。関係効力性 (relational efficacy) とは、二者間で共有された間主観的な効力期待を指し、自分たちの関係を脅かす問題の予防と解決のために互いの資源を協調的・統合的に活用できるというものである (浅野, 2011)。父親の育児行動に対する母親の評価や父親自身の自己評価は、子育てに参加しているという実感やそれを互いに認め合っているという感覚を反映するものであり、このような感情は肯定的な親アイデンティティの受容を促したり、関係効力性を高める要因となりうると考えられる。

そこで本研究では、夫婦から家族へと関係性が移行する時期と考えられる第1子誕生後の夫婦を対象に、父親の育児行動への父母それぞれの評価と夫婦の親アイデンティティおよび関係効力性との関連について探索的に検討する。

## 【 方 法 】

### 調査協力者

平成31年3月にクロスマーケティング社に依頼し、現在3歳未満の子どもが1名のみの夫婦100カップル（夫100名、妻100名）を対象に、WEB上でのアンケート調査を実施した。平均年齢は、男性が34.83歳 ( $SD = 5.44$ )、女性が32.72歳 ( $SD = 4.90$ ) であった。なお、本調査の実施については、本学の倫理審査委員会の承認を受けている（番号：2018-030）。

### 質問項目

質問を開始する前に、調査協力者のプライベートな情報について尋ねる項目が多数存在するため、①回答は全て記号化されコンピュータで統計的に処理されるため、個人を特定したり、情報が漏れることはないこと、②回答しづらい項目については、回答せず次の質問に移ってよいことを教示した。また、Web調査の最初のページに調査協力者が最後まで回答することをもって、本研究への参加の「同意」とすることについて明記した。

#### 1) 夫婦関係満足度

諸井 (1996) の「夫婦関係満足度尺度」を用いて、父母双方による夫婦関係の満足度を評価した。尺度には、「夫」という文言が入っていたが、夫婦に回答を求めため「夫/妻」に統一して尋ねた。計6項目について、「1. ほとんどあてはまらない」～「4. かなりあてはまる」までの4件法で回答を求めた（母親： $\alpha = .929$ , 父親： $\alpha = .947$ ）。

## 2) 夫婦の関係効力感

浅野 (2009) の「関係効力感尺度」を用いて、父母双方による夫婦の関係効力性を評価した。計10項目について、「1. まったく思わない」～「5. 非常に思う」までの5件法で回答を求めた (母親:  $\alpha = .955$ , 父親:  $\alpha = .952$ )。

## 3) 親アイデンティティ

夫婦それぞれの「親としてのアイデンティティ」を評価するために、山口 (2010) の親アイデンティティ尺度及び母親アイデンティティ尺度を参考に、17項目を選択して用いた。「1. ぜんぜんそう思わない」から「5. まったくその通りである」の5件法で回答を求めた。項目の詳細は結果で示す。

## 4) 母親の父親の育児行動に対する評価 (他者評価) 及び父親自身の育児行動への評価 (自己評価)

西尾 (2013) の父親育児行動リストを基に、「母親と子どもの育て方やしつけの方針について話し合う」、「子どもができて、夫婦だけの時間を確保する」、「夫の両親との関係を上手に調整する」、「子どもができて、セックスレスにならない」の4項目を追加した計15項目について「1. 全くやっていない」から「5. 頻繁にやっている」の5件法で回答を求めた。

この尺度においては、「子どもをお風呂に入れる」、「子どもと一緒に遊ぶ」など、直接子どもに働きかける育児行動である「対子ども育児」8項目 (母親:  $\alpha = .807$ , 父親:  $\alpha = .809$ ) と、「炊事、洗濯、掃除などの家事をする」、「母親に対してねぎらいの言葉をかける」など、育児する母親を支援することで間接的に育児に関わる「対母親支援」 (母親:  $\alpha = .855$ , 父親:  $\alpha = .859$ ) の2因子構造が確認されている。

なお、上記の項目のほかに、家庭環境に関する項目として、①年齢、②配偶者の年齢、③職業、④配偶者の職業、⑤子どもの月齢、⑥結婚期間、⑦収入についても尋ねた。

## 【 結 果 】

### 1. 調査協力者の属性

まず、職業については、男性は会社員が63.5%と最も多く、次いで公務員・教職員が12.5%、専門職 (弁護士、税理士等、医療関連) が7%であった。女性は専業主婦が50.5%となっており、約半数が無職であった。有職者の割合については、会社員が20%、パート/アルバイトが8.5%、専門職 (弁護士、税理士等、医療関連) が7%となっていた。次に、世帯収入は400万～600万未満が34.5%と最も多く、次いで200万～400万円未満が20.5%、600万～800万未満が15.0%、800万～1000万未満が13.0%であった。厚生労働省 (2018) の国民生活基礎調査によれば、30代の1世帯あたりの平均所得額は574万1千円となっており、平均的な世帯収入の調査協力者であった。最後に、結婚期間は平均43.29ヶ月 ( $SD = 29.28$ ) で、子どもの月齢平均は12.89ヶ月 ( $SD = 6.29$ ) であった。

### 2. 親アイデンティティ (親ID) の因子分析

まず、夫婦それぞれの「親としてのアイデンティティ」の構造について検討するために、因子分析を行った。

## (1) 母親の親アイデンティティ

母親の回答した親アイデンティティ（以下、親ID）17項目について、因子分析（最尤法・プロマックス回転）を実施した。固有値1.0以上の基準で3因子を抽出した（Table 1）。なお、因子負荷量が低い、もしくはダブルローディングしていた3項目「10. 親としてやっていける自信がある」、「14. 子育てを楽しんでいる」「17. 親として自分に何か意味のあることができるとは思えない」については除外した。なお、抽出された3因子で14項目の全分散を説明する割合は47.19%であった。

第1因子は「自分は親として不適格なのではないかと思う」、「親としてどうあるべきなのかまったくわからない」などの7項目で構成されていた。これらの項目は、親としての不全感や自信のなさを示す因子であり、「親としての自信のなさ」因子とした（ $\alpha = .865$ ）。第2因子は「子育てを楽しんでいる」、「親になって良かったと思っている」などの5項目で構成され、親としての役割を受け入れていることを示す因子であったことから「親役割の受容」因子とした（ $\alpha = .723$ ）。第3因子は「親として一人前だと思っている」「子育てよりも自分の生きがいを充実させることの方が重要だと思う」の2項目からなり、親としての自信をみせる項目と個としての自分を優先させる項目で構成されていたことから「自己優先的な親役割」因子とした（ $r = .247, p < .01$ ）。

Table 1 母親の親IDの因子分析結果

	因子		
	I	II	III
I. 母親としての自信のなさ ( $\alpha = .865$ )			
W16. 自分は親として不適格なのではないかと思う	.820	-.017	-.120
W7. 人からダメな親だと思われるのではないかと不安である	.785	.110	-.091
W8. 親としてどうあるべきなのかまったくわからない	.767	.132	.013
W3. この先、子育てをどう進めて良いのか見当もつかない	.727	.079	.012
W13. 気持ちの上ではまだ親になりきっていない気がする	.641	.030	-.047
W9. 子育てに疲れてしまい、どうしていいのかさっぱりわからない	.606	-.232	.152
W2. 「親である私」は、本当の私ではないような気がする	.448	-.200	.255
II. 母親役割の受容 ( $\alpha = .723$ )			
W14. 子育てを楽しんでいる	-.121	.757	-.039
W12. 親になって良かったと思っている	.132	.709	-.218
W1. これまでも親として順調にやってきたし、これからも順調にやっていけると思う	.044	.586	.369
W15. 親として関わっている時が、一番自分らしいと思う	.131	.522	.217
W6. 子育てについて自分なりの考えを持っている	-.013	.485	.028
III. 自己優先的な母親役割 ( $r = .247, p < .01$ )			
W18. 親として一人前だと思っている	-.152	.136	.778
W5. 子育てよりも自分の生きがいを充実させることの方が重要だと思う	.175	-.058	.387
因子間相関			
	I	-.452	.159
	II		.025

## (2) 父親の親アイデンティティ

夫の回答した親ID17項目について、母親同様に因子分析（最尤法・プロマックス回転）を実施した。固有値1.0以上の基準で4因子を抽出した（Table 2）。なお、因子負荷量が低い、もしくはダブルローディングしていた3項目「2. 「親である私」は、本当の私ではないような気がする」「4. 子どもにとって良い親であると思っている」「10. 親としてやっていける自信がある」については除外した。なお、抽出された3因子で14項目の全分散を説明する割合は48.65%であった。

第1因子は「人からダメな親だと思われるのではないかと不安である」、「この先、子育てをどう進めて良いのか見当もつかない」などの7項目で構成されていた。これらの項目は、親としての不全感や自信のなさを示す因子であり、「親としての自信のなさ」因子とした（ $\alpha = .868$ ）。第2因子は「子育てを楽しんでいる」、「親になって良かったと思っている」などの4項目で構成され、親としての役割を受け入れていることを示す因子であったことから「親役割の受容」因子とした（ $\alpha = .734$ ）。第3因子は「親として一人前だと思っている」「子育てよりも自分の生きがいを充実させることの方が重要だと思う」の2項目からなり、親としての自信をみせる項目と個としての自分を優先させる項目で構成されていたことから「自己優先的な親役割」因子とした（ $r = .217, p < .01$ ）。第4因子は「15. 親としてかかわっ

Table 2 父親の親IDの因子分析結果

	因子			
	I	II	III	IV
I. 父親としての自信のなさ ( $\alpha = .868$ )				
H 7. 人からダメな親だと思われるのではないかと不安である	.820	.108	-.003	.163
H 3. この先、子育てをどう進めて良いのか見当もつかない	.799	.054	-.121	-.054
H 8. 親としてどうあるべきなのかまったくわからない	.745	.009	-.123	-.075
H 9. 子育てに疲れてしまい、どうしていいのかわからない	.719	-.195	.024	.287
H13. 気持ちの上ではまだ親になりきっていない気がする	.565	.069	-.057	-.459
H16. 自分は親として不適格なのではないかと思う	.549	-.241	.115	.025
H17. 親として自分に何か意味のあることができるとは思えない	.518	-.061	.301	.036
II. 父親役割の受容 ( $\alpha = .734$ )				
H14. 子育てを楽しんでいる	.029	.731	-.079	.103
H12. 親になって良かったと思っている	.048	.683	-.206	.038
H 1. これまでも親として順調にやってきたし、これからも順調にやっていけると思う	-.047	.617	.350	-.053
H 6. 子育てについて自分なりの考えを持っている	-.006	.575	.169	.187
III. 自己優先的な父親役割 ( $r = .217, p < .01$ )				
H18. 親として一人前だと思っている	-.089	.061	.557	.086
H 5. 子育てよりも自分の生きがいを充実させることの方が重要だと思う	.216	.017	.433	-.216
IV. 父親役割の受容				
H15. 親として関わっている時が、一番自分らしいと思う	.159	.155	.000	.489
因子間相関				
	I	-.577	.307	-.297
	II		-.153	.072
	III			.108

ている時が一番自分らしい」という1項目のみで構成されていた。この因子については1項目のみであることから、本研究においては以後の分析には用いないこととする。

最後に、本研究では夫婦における父親の育児行動と親IDおよび関係効力性との関連を検討することを目的としているため、結果の解釈において父母の親IDの項目を統一することが望ましいと考えた。親としての自信のなさについては、母親の「2. 「親である私」は本当の私ではないような気がする」及び父親の「17. 親として自分に何か意味のあることができるとは思えない」を除外し、父母共通の項目のみで変数を作成した。また、親役割の受容についても、母親の「6. 親として関わっている時が一番自分らしいと思う」を除外して変数を作成した。

3. 夫婦の関係満足度, 夫婦の関係効力感, 母親/父親の親アイデンティティ, 育児行動の評価 (他者評価/自己評価), 母親/父親の育児ストレスの基礎データ

分析に入る前に、使用する各変数についての記述統計および相関分析の結果を Table 3, Table 4に示す。

Table 3 母親と父親の親IDと夫婦関係満足度, 関係効力感, 育児行動の平均値 (SD)

妻： 夫婦関係 満足度	妻： 関係 効力感	母親ID			父親の育児行動への評価	
		母親としての 自信のなさ	母親役割の 受容	自己優先的な 母親役割	対子ども育児 (他者評価)	対母親支援 (他者評価)
3.02	3.49	2.79	3.72	2.41	3.38	3.24
(0.72)	(0.84)	(0.78)	(0.64)	(0.78)	(0.81)	(0.83)
夫： 夫婦関係 満足度	夫： 関係 効力感	父親ID			父親自身の育児行動への評価	
		父親としての 自信のなさ	父親役割の 受容	自己優先的な 父親役割	対子ども育児 (自己評価)	対母親支援 (自己評価)
3.13	3.62	2.52	3.76	2.65	3.39	3.35
(0.66)	(0.79)	(0.80)	(0.71)	(0.78)	(0.83)	(0.83)

Table 4 夫婦関係満足度, 関係効力感, 親ID, 育児行動評価, 育児ストレスの相関係数

	妻： 夫婦関係 満足度	妻： 関係 効力感	母親ID			父親の育児行動 への評価		
			母親とし ての自信 のなさ	母親役割 の受容	自己優先 的な母親 役割	対 子ども 育児	対 母親 支援	
夫：夫婦関係満足度	.650**	.578**	-.118 <sup>†</sup>	.215**	-.044	.322**	.486**	
夫：関係効力感	.491**	.689**	-.204**	.237**	.124 <sup>†</sup>	.320**	.538**	
父親ID	父親としての自信のなさ	-.186**	-.155*	.552**	-.278**	.232**	-.161*	-.136 <sup>†</sup>
	父親役割の受容	.216**	.219**	-.239**	.462**	-.070	.194**	.190**
	自己優先的な父親役割	-.106	.023	.108	-.007	.391**	-.085	-.050
父親自身の 育児行動	対子ども育児	.220**	.274**	-.119 <sup>†</sup>	.126 <sup>†</sup>	.005	.776**	.536**
	対母親支援	.415**	.462**	-.135 <sup>†</sup>	.197**	.106	.554**	.726**

<sup>†</sup> p < .10, \* p < .05, \*\* p < .01, \*\*\* p < .001

特徴的な点についてのみ述べる。まず、父親の親アイデンティティについては、「父親としての自信のなさ」と「母親としての自信のなさ」との間、「父親役割の受容」と「母親役割の受容」との間、「自己優先的な父親役割」と「自己優先的な母親役割」との間に正の相関があった。一方、母親の親アイデンティティについては、父親と同様に「母親としての自信のなさ」は「父親としての自信のなさ」との間、「母親役割の受容」と「父親役割の受容」との間に有意な正の相関があった。ただし、「自己優先的な母親役割」のみ、「自己優先的な父親役割」に加え、「父親としての自信のなさ」との間にも正の相関があった。すなわち、自己優先的な母親役割を持つ妻をもつ夫は、自己優先的な父親役割を持つと同時に、父親としての自信のなさを感じている可能性があるだろう。

また、「育児行動への評価」については、「対子ども育児」「対母親支援」ともに、母親から父親への評価と父親の自己評価の正の相関が強かったことから、「父親の育児行動」に対して父母のずれは少なく、正確に評価されている可能性が示された。

以上の結果より、夫婦の間で補い合うような「親アイデンティティ」が形成されているというよりはむしろ、夫婦においては類似した「親アイデンティティ」が獲得される傾向にあることが推察できるだろう。

#### 4. 父親の育児行動と夫婦の親アイデンティティ及び関係効力感との関連

父親の育児行動への評価と、夫婦それぞれの親アイデンティおよび夫婦の関係効力感との関連について検討するため、夫婦それぞれの「対子ども育児」「対母親支援」得点を中央値折半し、高低の2群に分け、それらを独立変数、親アイデンティ（母親／父親）と関係効力感（母親／父親）を従属変数とする2要因の分散分析を行った（Table 5, Table 6）。

まず、母親の「父親の育児行動への評価」においては、父親の「自己優先的なアイデンティ」のみに有意傾向の交互作用がみられた。そこで単純主効果の検定を行った結果、「対母親支援」低群において、「対子ども育児」の低群より高群の方が父の「自己優先的なアイデンティ」得点は低かった。すなわち、母親が父親の対母支援を評価していない場合でも、子どもの育児をしていると評価された場合、していないと評価された父親よりも自己優先的なアイデンティを持ちにくいことが示された。また、夫婦双方の「関係効力感」、「母親としての自信のなさ」と「父親とし自信のなさ」、「母親役割の受容」と「父親役割の受容」において「対母支援」の主効果が確認されたことから、母親が父親の対母支援行動を高く評価している方が、夫婦ともに関係効力感を感じやすく、親としての自信があり、親役割を受容していると考えられた。

次に、父親自身の「育児行動への評価」においては、母親の「自己優先的なアイデンティ」に有意な交互作用、夫の「関係効力感」、「父親としての自信のなさ」、父親の「自己優先的なアイデンティ」に有意傾向の交互作用がみられた。そこで単純主効果の検定を行った結果、母親／父親の「自己優先的なアイデンティ」と「父親としての自信のなさ」において、「対子ども育児」の低群で「対母支援」の低群より高群の得点が低く、「対母支援」の低群でも「対子ども育児」の低群より高群の得点が低かった。すなわち、父親が子どもに対する育児を低く自己評価していても、母親への支援の自己評価が高い場合、母親／父親ともに自己優先的なアイデンティティを持たず、父親としての自信も失わないことが示された。また、父親の対母親支援の自己評価が低くても、子に対する育児の自己評価が高い場合、母親／父親ともに自己優先的なアイデンティティを持たず、父親としての自信も失わないと考えられた。また、母親の「自己優先的なアイデンティ」では、「対母支援」の高群で「対子ども育児」の低群より高群の得点が



Table 5 対子ども育児×対母親支援ごと（母親評価）の関係効力感と親ID尺度における平均値と2要因分散分析の結果

対子支援 対母親支援	低群		高群		多重比較 (TukeyHSD法)		
	低群	高群	低群	高群	主効果		交互作用
	n = 78	n = 21	n = 23	n = 78	対子ども育児	対母親支援	
妻の 関係効力感	3.14 (0.82)	3.83 (0.64)	3.04 (0.92)	3.89 (0.66)	0.02	35.85*** 低群<高群	0.39
夫の 関係効力感	3.33 (0.68)	3.96 (0.61)	3.19 (0.69)	3.95 (0.80)	0.35	31.29*** 低群<高群	0.26
母親としての 自信のなさ	2.94 (0.59)	2.48 (0.61)	2.99 (0.93)	2.67 (0.91)	0.82	8.38** 低群>高群	0.28
母親役割の 受容	3.56 (0.62)	3.73 (0.63)	3.65 (0.49)	3.89 (0.68)	1.33	3.38† 低群<高群	0.12
自己優先的な 母親役割	2.47 (0.72)	2.29 (0.49)	2.24 (0.74)	2.44 (0.92)	0.09	0.00	1.99
父親としての 自信のなさ	2.68 (0.64)	2.40 (0.64)	2.60 (0.79)	2.37 (0.96)	0.17	3.67† 低群>高群	0.04
父親役割の 受容	3.56 (0.65)	4.00 (0.50)	3.66 (0.66)	3.93 (0.77)	0.03	9.16** 低群<高群	0.54
自己優先的な 父親役割	2.82 (0.61)	2.52 (0.66)	2.41 (0.49)	2.57 (0.98)	1.87	0.28	2.96†

括弧内は標準偏差

†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

Table 6 対子ども育児×対母親支援ごと（父親評価）の関係効力感と親ID尺度における平均値と2要因分散分析の結果

対子支援 対母親支援	低群		高群		多重比較 (TukeyHSD法)		
	低群	高群	低群	高群	主効果		交互作用
	n = 78	n = 21	n = 23	n = 78	対子ども育児	対母親支援	
妻の 関係効力感	3.18 (0.89)	3.62 (0.55)	3.06 (0.77)	3.86 (0.73)	0.23	22.83*** 低群<高群	2.01
夫の 関係効力感	3.30 (0.64)	3.74 (0.62)	3.17 (0.75)	4.00 (0.79)	0.30	28.17*** 低群<高群	2.75†
母親としての 自信のなさ	2.92 (0.64)	2.58 (0.61)	2.82 (0.63)	2.73 (0.96)	0.04	2.69	0.92
母親役割の 受容	3.53 (0.61)	4.00 (0.37)	3.61 (0.53)	3.83 (0.72)	0.16	10.80** 低群<高群	1.43
自己優先的な 母親役割	2.54 (0.63)	2.13 (0.81)	2.08 (0.67)	2.47 (0.89)	0.22	0.01	9.60**
父親としての 自信のなさ	2.81 (0.61)	2.30 (0.77)	2.42 (0.70)	2.35 (0.93)	1.68	4.90* 低群>高群	2.81†
父親役割の 受容	3.47 (0.60)	3.96 (0.68)	3.80 (0.65)	3.95 (0.75)	2.09	7.91** 低群<高群	2.17
自己優先的な 父親役割	2.85 (0.58)	2.46 (0.67)	2.48 (0.67)	2.56 (0.95)	1.10	1.50	3.50†

括弧内は標準偏差

†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

高かったことから、父親の対母親支援の自己評価が高く、かつ子どもへの育児に対する自己評価も高い場合、母親は自己優先的アイデンティティを獲得しやすいことが明らかとなった。また、夫の「関係効力感」では「対子ども育児」の低群・高群ともに、「対母支援」の低群より高群で得点が高かった。すなわち、子への育児行動に対する自己評価の高低に関わらず、父親が母親への支援を高く自己評価している場合、夫は夫婦の関係効力感を感じているといえるだろう。さらに、妻の「関係効力感」、「母親役割の受容」および「父親役割の受容」に、「対母支援」の主効果が確認された。つまり、父親の対母支援の自己評価が低い群より高い群の方が、妻は夫婦の関係効力感を感じており、夫婦ともに親役割を受容していることが示された。

以上のことから、父親の育児行動評価（他者評価）においては、母親への支援に対する評価の高さが夫婦の関係効力感の高さや親としての自信、親役割の受容に関連していることが明らかとなった。また、父親の育児行動評価（自己評価）においても、母親への支援への自己評価の高さが夫婦の関係効力感の高さや親役割の受容に関連することが示された。ただし、対母支援への自己評価が低い場合であっても、子どもに対する育児への自己評価が高い場合は、母親／父親ともに自己優先的なアイデンティティを獲得せず、父親としての自信のなさを失わないと考えられた。

## 【 考 察 】

本研究の目的は、夫婦から家族へと関係性が移行する時期と考えられる第1子誕生後の夫婦を対象として、父親の育児行動への評価と夫婦の親アイデンティティおよび関係効力性との関連について探索的に検討することであった。

まず、分析に先立ち母親と父親の親アイデンティティの構造を検討しところ、父親の親アイデンティティについては、山下・石田・加藤（2018）とほぼ同じ因子構造が明らかとなり、先行研究を支持する結果が得られた。一方、母親の親アイデンティティについては、先行研究とは異なる因子構造が示された。3歳児未満の母親を対象とした調査を行った山下・加藤・石田（2016）では、母親アイデンティティとして「親としての自信のなさ」、「親としての効力感」、「親役割の受容」、「親役割からの逃避」の4因子構造が認められたが、本研究では「親としての効力感」と「親役割からの逃避」という因子が消え、「親としての自信のなさ」、「親役割の受容」、そして新たに「自己優先的な親役割」という、父親の親アイデンティティと同じ3因子構造が得られた。「自己優先的な親役割」について、山下・加藤・石田（2018）は、日常的には肯定的な親アイデンティティを持っていると評価していても、育児におけるストレスや躓きなど困難な場面では揺らぎやすい親アイデンティティであることを示唆している。本研究においては、母親においても父親においても同じような脆弱なアイデンティティが形成される可能性が示された。なお、岡本（1996）は、夫との肯定的な関係や家族に対する積極的関与は、個としてのアイデンティティと母親としてのアイデンティティの統合を支えるものであると指摘している。本研究では、3歳未満の子ども1人をもつ夫婦を調査対象としたため、ともにアンケートに答えることができる程度に夫との協力関係がある母親が回答を行ったと考えられる。山下・石田・加藤（2016）では考慮されなかったこうした夫婦の関係性の違いが、因子構造の違いとなって表れた可能性もある。父親と母親の親アイデンティティの構造については今後も引き続き検討を行う必要があり、その共通点や相違点の詳細を明らかにするためにも自由記述の分析や面接法による検討など質的な検討が必要だと考える。

次に、分析に用いる夫婦間の各変数について、相関関係を分析した。その結果、母親と父親の親アイ

デンティティには類似性が見られた。神谷・菊池（2004）は、「親としてどのようにふるまうかという認識」である親役割観について、妊娠期よりも育児期に夫婦間ズレが大きくなると指摘した。しかし本研究の結果からは、役割観の違いにかかわらず、役割を受容することや親としての自信といった「親としてのあり方」については夫婦に類似性が見られる可能性が示唆された。ただし、小野寺（2003）は、男性と女性では親になった後、親としての自分の役割を受容していく過程に違いが認められる可能性を指摘している。他の先行研究においても、女性の発達の場合男性とは異なる複雑な様相を呈することが指摘されており（堀内、1993；岡本、1996；岡本；2000）、今後は親アイデンティティ獲得のプロセスについて妊娠期も含めた早期から縦断的な調査を行う必要があるだろう。

次に、父親の育児行動への評価の高低（他者評価／自己評価）と、夫婦それぞれの親アイデンティティおよび関係効力感との関連について検討した。その結果、母親の父親の育児行動への評価においては、母親が父親の対母支援を高く評価していると、夫婦ともに関係効力感が高く、親役割を受容し、親としての自信が低減していなかった。また、父親自身による育児行動への自己評価においても、対母支援への自己評価の高さが夫婦の関係効力感の高さや親としての自信、親役割の受容に関連することが示された。山下・加藤・石田（2016）は、父親が子育てを手伝ってくれないという育児ストレスを強く感じている、父親が母親に対する支援を行なっているほど母親の親としての効力感が高まることを示唆している。西尾（2013）もまた、父親が直接子どもに働きかける対子ども育児を行うよりも、育児という意味においては間接的な関わりともいえる対母親支援を行うことが、母親の「父親の支援のなさ」ストレスを低減させることを明らかにしている。こうした結果を勘案すると、育児期の夫婦関係および親アイデンティティの形成には、父親が子どもの世話を行う直接的な育児行動よりも、母親に対して支援する間接的な育児行動が重要である可能性が改めて示されたといえるだろう。近年、父親の育休や子育て参加への期待が高まっているが、今後は、父親の育児には子どもへの直接的な育児行動だけでなく、母親へのサポートという間接的な育児支援があること、またその大切さについても言及していく必要があるだろう。ただし、父親の対母支援への自己評価が低い場合でも、子どもに対する育児への自己評価が高い場合は、母親・父親ともに自己優先的なアイデンティティを獲得せず、父親としての自信も失われていなかった。そのため、母親への支援ができていなくても、せめて子どもへの育児に積極的に関わることによって、父母は自己優先的な親アイデンティティを形成せず、父親の親としての自信を維持できると推察された。

最後に、本研究の今後の課題について述べる。本研究は夫婦の親アイデンティティや育児行動への評価、関係効力性について、夫婦が互いにどう考えているのかを知るため、カップルデータの収集を行った。そのため、第1子の出生によって新たな関係を築き始めた夫婦の回答を得ることはできたものの、夫婦がともに回答することができる程度に関係が安定しており、協力的なカップルを対象とせざるを得なかった。したがって、親としてのアイデンティティや関係効力性、夫の育児評価の相違は検討できたが、夫婦関係の葛藤や危機の有無、また子どもの成長に獲得されたアイデンティティや夫婦の関係がどのように影響していくのかというプロセスについては明らかにできていない。また、子どもの月齢や同胞の誕生によって親に求められる具体的な役割は変わっていき、親としてのアイデンティティも変容していく可能性が考えられる。特に、妊娠・出産など身体的な変化をとまなう体験が得られない男性は、女性と比して実際の育児を通じて初めて父性意識を獲得するため、母親とは親性の獲得に時期のズレがあると指摘されている（及川、2005）。したがって、男性と女性では子どもの成長や子どもとの関係によって親としてのアイデンティティを育む時期が異なる可能性について考慮する必要があるだろう。ま

た本研究では、父母それぞれの子どもに対する育児評価と母親に対する支援の相違に着眼し、親としてのアイデンティティや関係効力性との関連について検討を行ったが、これらの変数の因果関係の連鎖については検討できていない。そのため、ペアデータにおける相互依存性の問題を考慮しながら、マルチレベル構造方程式モデリング等を用いた影響過程に関する検討も必要であると考え。以上については本研究の今後の検討課題としたい。

## 【引用文献】

- 明野聖子 (2013). 妊娠期から乳幼児期における父親の親としての発達に関する文献レビュー 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 9, 65-71.
- 浅野良輔 (2009). 親密な対人関係に関する楽観性・効力感尺度の邦訳と信頼性・妥当性の検討 対人社会心理学研究, 9, 121-130.
- 浅野良輔 (2011). 恋愛関係における関係効力性が感情体験に及ぼす影響：二者の間主観的な効力期待の導入 社会心理学研究, 27, 41-46.
- 浅野良輔・吉田俊和 (2011). 関係効力性が二つの愛着機能に及ぼす影響—恋愛関係と友人関係の検討— 心理学研究, 82, 175-182.
- Belsky, J., & Kelly, J. (1994). The transition to parenthood. New York: Delacorte Press. (安次嶺佳子 (訳) (1995) 『子供をもつと夫婦に何が起こるか』草思社)
- 芳賀道 (2000). 母親の育児ストレスに対する父親のソーシャル・サポートの緩衝効果について 中央大学大学院研究年報, 30, 211-218.
- 堀洋道・吉田富二雄 (2001). 心理測定尺度集Ⅱ 人と社会のつながりをとらえる<対人関係・価値観> 夫婦関係満足度尺度 (諸井, 1996), 150-152.
- 堀内和美 (1993). 中年期女性が報告する自我同一性の変化—専業主婦, 看護婦, 小・中学校の教師の比較— 教育心理学研究, 41, 11-21.
- 石田有理・山下倫実・加藤陽子 (2017). 親アイデンティティを規定する要因に関する探索的検討 (1) —父親の育児行動に対する母親の評価及び育児ストレスと母親アイデンティティとの関連—, 日本心理学会第81回大会.
- 神谷哲司・菊池武剋 (2004). 育児期家族への移行にともなう夫婦の親役割観の変化 家族心理学研究, 18 (1), 29-42.
- 柏木恵子・若松素子 (1994). 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 厚生労働省 (2018). 平成30年 国民生活基礎調査の概況 <<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa18/index.html>> (2019年12月25日).
- 中澤智恵・倉持清美・田村毅・岸田泰子・木村恭子・及川裕子・森田 千恵・荒牧美佐子 (2003). 出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響 (4) 第1子出生後の夫婦関係の変化と子育て 東京学芸大学紀要, 55, 111-122.
- 西尾新 (2013). 母親の育児ストレスに対する父親の育児行動の影響—育児頻度の評価及び父母間の評価の齟齬から— 甲南女子大学研究紀要 (人間科学編), 49, 59-74.
- 及川裕子 (2005). 親性の獲得過程における変化とその影響要因の検討 日本ウーマンズヘルス学会誌, 4, 81-91.

- 岡本祐子 (1996). 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究 日本家政学会誌, 47, 849-860.
- 岡本祐子 (2000). 成人期の「自分」探し：ケアすることを通じての〈他者〉育てと〈自分〉育て 発達, 82, 56-63.
- 岡本裕子 (2007). アイデンティティ生涯発達論の展開 ミネルヴァ書房, 36-39.
- 小野寺敦子 (2003). 親になることによる自己概念の変化 発達心理学研究, 14, 180-190.
- 清水嘉子・関水しのぶ (2010). 母親の育児ストレス尺度—短縮版作成と妥当性の検討—子どもの虐待とネグレクト, 12, 261-270.
- 総務省統計局 (2017). 平成28年社会生活基本調査—生活行動に関する結果— (<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou.pdf>) (2019年9月1日)
- 高橋桂子・佐野綾香 (2010). 父親から母親への情緒的サポートが母親の育児不安の緩和に及ぼす影響 新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編, 2, 165-170.
- 山口雅史 (2010). 母親になるということ—母親アイデンティティを巡る考察 (椋山女学園大学研究叢書) あいり出版.
- 山下倫実・加藤陽子・石田有理 (2016). 育児ストレスが母親アイデンティティに及ぼす影響に関する予備的検討—父親の育児行動に対する評価に着目して— 十文字学園女子大学紀要 47, 25-36.
- 山下倫実・石田有理・加藤陽子 (2017). 親アイデンティティを規定する要因に関する探索的検討 (2)—父親自身の育児行動及び育児ストレスと父親アイデンティティとの関連— 日本心理学会第81回大会.

#### 付記

- 1) 本研究は十文字学園女子大学プロジェクト研究費の助成を受けて実施されたものである。
- 2) 本研究は、日本心理学会第83回大会 (2019年) において発表された内容に加筆修正を行ったものである。

